

## ⑦ 知的障害者の保健衛生・看護

## 課題

支援員として毎日の健康チェックを行う際、利用者の体調不良を早期発見するためにはどのような観察をするか論述しなさい。

知的障害を持っている人は、自分の体調不良を上手に訴えられない人が多い。そのため支援員は利用者一人ひとりの睡眠・食事・排泄・活動・癖やこだわり、表情までをとらえて、「いつもと違う。何かおかしい。」というような発見ができるような感性を養っておかなければならない。そのために必要な観察点を論述する。

人間が生存しているかどうかの判断や、どの程度元気に生存しているのかを判断する項目として「生存兆候＝バイタルサイン」が決められている。バイタルサインには体温・脈拍数・呼吸数・血圧・意識レベルなどが含まれ、現在の身体の状態を知る一つの目安になる。しかし、正しい値を出すためにはきちんとした測定法を学ぶ必要があり、バイタルサインの平均値を学ぶとともに、その人の平均的な測定値を把握しておく必要がある。

そして、利用者の基礎疾患や合併症、内服薬の内容に加え、過去に入院や手術を受けたことがあれば把握しておく必要がある。これらの情報は、健康上どのようなリスクを持っているかを評価し、今後どのような症状に注意しなければならないかといった方針を立てるうえで重要である。

また、家族との連絡を密にし、家庭での毎日の体調の変化、服薬状況はもちろんであるが、普段から利用者の食事摂取量や嗜好を知っておく

とも大切である。食欲低下や過食などがないか。水分の過剰摂取、または不足がないかを注意深く観察する。

また、口腔内は定期的に観察する。虫歯や歯肉の病気、義歯不適合、また抗てんかん薬の中には歯肉増殖を副作用に持つものがあり歯周病になりやすい。歯周病は出血、排膿、口臭だけでなく全身の健康にも影響を及ぼす。飲食をしなないと唾液分泌が減少し、細菌が繁殖しやすくなるため、食事摂取ができないときにも口腔ケアを行なう必要がある。

次に健康状態を知る上で、尿・便の観察は重要である。人の身体の70%は水分であるが、排尿はその水分が過不足なく循環しているかどうかをしる目安になるため、尿の回数、尿量、尿の性状に注意する必要がある。

便の性状は、固さ・形態の他に血液の混入にも注意する。同時に複数の人が下痢をしている場合、感染性下痢症の可能性を考慮し、施設全体の対応を考える必要がある。

下着の汚れにも気を配る必要がある。特に閉経後の女性の血性物の汚れは婦人科疾患を疑うことも大事なことである。

排泄はプライバシーの上から、特に自立している人ほど実際の観察が難しいことがある。普段から、排泄についても介入できるような信頼関係を作っておくことが大事である。

そして、日中活動や生活リズムを把握することで良い睡眠が得られているかどうか推察することができると思う。睡眠に大切なものは、時間の長さより質の確保である。入眠・起床がスムーズで日中活動に支障がなければ問題はないと考える。

その他、薬の処方内容の変化、皮膚疾患など、日常の変化を見逃さないようにし、支援員全員がその情報を共有し、支援することが重要である。

私達生活介護支援通所施設では、毎年の個別面談の時のアセスメントを基本とし、本人との言語・非言語コミュニケーションはもちろんのこと、毎日の家族との連絡ノートを利用し、就寝・起床時間・排尿・排便・食欲等、日々の利用者の体調や情緒などの情報交換を行なっている。

特に言語的コミュニケーションが苦手な知的障害者の場合、「いつもと違う」に気付く上では、身体のバイタル面だけでなく、自傷や他害、こだわり(固執)などの行動、「いつもの事」「またこんなことして」という行動からくる要因が体調不良のメッセージであることが多く、それを見過ごし、気が付いた時に、「このことであんな行動だっ

たんだ」という事も多く、手遅れになることも多い。そして痛覚などの感覚に特別なことがある人も多い。骨折していても平気である、電機や光がまぶしくていられない、音により、異常に反応するなど、個々の身体の特徴理解が必要である。

自分たちの「普通」がその人達には異常にづらい場合もある為、日頃からその人の行動や反応をメッセージととらえ関わる事が大切であると考え。

毎朝、手洗い・うがいをし、流行性疾患の予防をする。風邪などが流行しやすい季節には毎朝検温し、体調の変化を確認している。

家庭から体調の変化等の連絡があった場合には、些細な事か否かにかかわらず、看護師や他の支援員など、複数の目で確認し、経過観察をする。

また、日中活動においても、日ごらの活動量や行動パターン等を把握しておくことも重要であると考え、経過や結果を記録として残し、支援員全員が情報を共有することで、統一した支援ができるよう活用している。

**講評：**

とてもよく書けていると思いました。毎日の支援業務そのものが観察であり“その人”を知ることであるという意識をもって今後も支援技術を深めて欲しいと思います。